
ホワイトリール905

美舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホワイトリール905

【Nコード】

N3823X

【作者名】

美舞

【あらすじ】

呪われた国リッカセイテン
国が誇る魔法学校とある研究広間に時空が歪み
都内某所 高層マンションの一室の玄関が繋がった。

リッカセイテンに必要なのは

中の住民？それとも家？

20代後半ちよつとひねくれていてヲタク臭のする柳井千尋

彼女は国に何を伝えるのか

騎士が居間でトト〇に見入ってる
王子が従者を相手に格ゲーしてる
姫と侍女はB L本に夢中

余計なものを持ち込んだ気がしないでもない。

こんな状況で

呪いを救えるのか……

つつか……救う気があるのか？

1 (前書き)

処女作。やっちまった感満載です。やってみたかったです。
生温かく優しいまなざしで見えてやってくださいまし。

地味に下ネタでてるので15禁

呪われた国などと言ってますが、戦闘などは書けないのでまったり
ほのぼのゆるいギャグ系の予定です。

「ふふふつ やつと来たね」
リツカセイテンに呪いをかけた張本人だけ。

6人は寝込んでいた。
熱があるとかお腹が痛いとか頭痛がひどいとか怪我だとか
そういうのではない。

ただただダルイ。動けないのだ。
魔力を根こそぎ持っていかれたような感覚
指一本動かすのも 瞬きするのさえも 体が言うことを聞いてくれない。

自分の体なのに思い通りに出来やしない
ベットからまったく動けない
寝がえりすらうてないが、寝てるしかない状況

なぜこんなことになっているのか・・・
考えられるのは昨日の魔法陣
動けない6人が導いた答えは
失敗したと思っていたそれしかなかった。
だがしかし 動けないので
それについて話すことも考えることも何もできず
ベットの上で寝てるしかなかった。

王宮は騒がしかった。

いや・・・正確には普段の方が騒がしいのかもしれないが・・・隣の魔法学校と言うなの更生施設が静かなのだ。

いつも朝から聞こえる爆発音悲鳴怒声笑い声が聞こえない

あの問題児6人が寝込んでる!!!

静かなのは大変ありがたい事なのだが

この6人は厄介なことに
リツカセイテンの第4王子を含む各国の重要人物ばかりなのだ。

まあ、呪われた国に預けられるくらいの問題児だが
国政においてはそんなこと関係ない。

一応、一応ではあるが客人
なにかあつたら大問題。

少ない侍女達と従者達は走り回っている。

そんな様子を見ていた国王は

第1から第3王子達に面倒事を全部押しつけた。

くふつくふふふふw

リビングを掃除しながら、柳井千尋は浮かれていた。
そりゃあもう・・・浮かれてた。

5日の有休と土日各2日、祭日を合わせた10連休！！！！！！
この10連休の為に色々なものと戦った。

有給届けを上司に提出した時「お前： 本気か？」と数回聞かれ
先輩には嫌味を言われ 同期には呆れられ 後輩の目は冷たかった。
「退社の前の有休消化じゃない？」などと社内で噂され
「休み明け出勤しても席なかったりね。」などと給湯室で言われた
日々

つたく 有休をちよつと取つたくら何だつて言うのよ。
皆出たがらない休日出勤も出たし 夏休みは人の合間をぬって飛び
石だったし

雑用も人の嫌がることも自分からやつたんだ。
たまの連休くらいいいじゃない！！と無理やり開き直った。

そんな面倒臭い日々も昨日まで
連休明けたあとは また少し嫌味を言われるかもしれないけれど
そんな事を気にしていたら この10日間楽しくない。
とにかく今日から連休だw

旅行も人に会う事も・・・なんの予定も入れていない！！
引きこもりお一人様万歳の時間

思いつきりダラダラしたい。

読む暇のなかった本を一気に読んだり ネットで朝までチャットしたり

思う存分動画を漁ったり 積みゲーを攻略したり

ゲームのコントローラーを握りしめたまま寝ちゃっうよ？

昼夜逆転生活

…なんて幸せなんだろう。

一人暮らしには少し大きい3LDKのマンション。

これはろくでなしの父親が唯一私にくれたもの

あんな父親からの恩恵なんて・・・と思った時期もあったが
そんな気持ちはとづくに持っていない。

固定資産税と管理費だけで住めるのだ

大変ありがたい。

玄関脇に右の部屋は段ボールが山積みでいっぱいになっている。

生活用品、食べ物などでも重い物日持ちのするもの（水、酒、米
カップ麺など）を

ネット通販で調子こいて まとめ買いしすぎた結果がこうなった。
10日間外出しなくても 正直困らないだけの物資はある。

まあ・・・それでも買い物欲は衰えなかったわけだ…

連休の初日は宅配便の受け取りをしつつ軽い掃除で終わった。

お腹空いたな・・・と思った時 時計は正午をさしていた。

んゝ本屋に寄って その後静かな喫茶店で本を読みながらブランチ。ケーキとコーヒードデザートまで堪能したら

そのまま買い物して カレーを作って2日くらいカレーのみで過ごすか。

…でも ちょっとお酒も飲みたいなあ。

惣菜を何個か買ってつまみつつビールでも飲むかな。

カレーは明日でもいいか。ま スーパーでその時考えようっと

そんな事を思いつつ 財布、カギ、携帯、タバコを入れたエコバックを持ち玄関を出る。

嘘

出ない。

正確に言えば一瞬出ようとしたけど 一歩も外に出ずに扉を閉めた。

「?」

もう一回そーっと 扉を開く

????????????????

頭が？でいっぱいになったので 扉を閉める。

ドアスコープを覗いてみた さつき見た光景しか見えない。

・・・おかしい。

玄関を外にでるつもりで開いた（普通だよな）

いつもだったら扉を開けると ふわっと外の風や匂いを体感する

玄関開けたら室内。 とか…ないわあ。

落ち着いたブラウンを基調とした部屋・・・というには広めだったけど部屋があった。

ついさつき宅配便を受け取った時はいつもの景色だった。

この数分でなにが起こった？

いやいやいや

起こってたまるか…たまるもんか。

疲れてるのかな？

昨日までの残業がやっぱ響いてるのかな？

うん。そうだ きつと疲れてるんだ。

自分が思ってる以上にひどい疲れで ちょっと幻覚が見えたただけだ。

そう言い聞かせても もう1度玄関を開けてみる自信がない。
また室内とか見えても困る大変困る。

… ちょっと落ち着こう。

カップ麺でも食べてひと眠りしようかな。

浮かれてた気分も一瞬で沈む

まったく何が起こってるのかはわからないが

千尋は少しでも落ち着こうと・・・タバコを吸いにリビングへ戻った。

3 (前書き)

1話1話が短いです。話がまったく進まないです。ごめんなさい。

美しい銀色の髪、少し吊りあがった切れ長の瞳は青くなんとなく冷たい印象を受ける。

自室の隣にある執務室

リツカセイテン騎士団 団長にして第一王子の肩書を持つ

ケイトアベルは机に肘をつき面倒臭そうに書類を眺めていた。

ちっ・・・なんで俺様がこんな事に時間を費やさなきゃなんねえんだよ。

クソガキ共が多少寝込もうが別にいいじゃねえか：

静かな方が平和でいいって何の問題もありやしねえ

このままでかまわねえ気もするが……だ

「リツカセイテン第4王子キシリハウラー、他5名

体調不良の原因究明、治療、それらに関わる全ての責任を

騎士団団長 第一王子 ケイトアベル

魔法師団団長 第二王子 レヤンナジグ

外交大使補佐官 第三王子 ニマウハサリ

上記3名に任せる。

リツカセイテン48代目国王」

簡潔な文ではあるが、ご丁寧に国王の印まで押してある。

完全に無視することも 忘れてたwテへ なんてしらばっくれることもできやしない。

あんの…クソ親父…たいして働きもしねえくせに、こんな時ばかり仕事早い…

誰かに聞かれてもしたら不敬罪に問われてもおかしくないセリフだが彼は脳内で国王に毒づいていた（今日だけで7回目）ので誰にも気づかれる事はなかった。

銀色の長い髪、後ろで一本に束ねていてもその輝きは失われない。切れ長で少しグレーがかかった青い瞳 妙に色っぽい印象を受ける。第一王子に似ているはいるが 向こうは泣き黒子、第三王子には口黒子

色香の違った美男 第三王子ニマウサハリは城の中庭にあたる庭園で佇みながら思っていた。

兄達がなんとかするだろう。…と 見事な他力本願である。

いつその事バカ6人を殺してしまった方が早いんじゃないか？

流行り病、大実験の上の事故死

呪いを患ってこじらせた…（この国の呪いはそういうもんじゃない）など別に理由なんか何でもいい。

外交大使補佐なんて肩書があるから 死んだあとは多少忙しいかも
しれないが

なんらかの責任を大使が取って退任したら

俺が補佐から大使になればいいだけ

大使になるのは面倒臭いが、遅かれ早かれその立場にいつかはならなきゃならない。

少し時期が早くなったとこで・・・この際それくらい仕方ないかもな。んー特に問題ないんじゃないか？

…今なら簡単に殺せそうだなあ。

兄達に6人を押し付けられたらそうしてしまおう。

それが1番手つとり早い。

他力本願か 殺すかの2托しか彼には思い浮かばなかった。

青みがかった黒い髪、ゆるいウェーブのかかった長い髪は
少し印象が違えば重い印象を受けるはずなのにまったくそんな印象
はない。

バイオレットの瞳、薄い唇、こちらもなかなか色っぽい美男である。
第二王子レヤンナジグは魔法学校第五研究広間で悩んでいた。

これは・・・なんだろう・・・。

この国で一番生真面目な王子である彼は他の王子達より先に一人で
(勝手に)

6人の元を訪れていた。

そこで見た6人には、魔力がほぼないことに気がついたのだ。

こいつら昨日なにかしたな。

余計なことをなんかやらかした・・・って事だけはわかった。

そして訪れた研究広間。

6人そろってやらかす としたらここしかないだろう。と

1から順番に見て回った

そしてこの第5研究広間に来た時異変に気がついた。

ドアがある。

見たこともない形式のドア…… いつの間に！？建て替え工事を??
などと一瞬思ってしまったが そうじゃないだろうと自分に言い聞
かせ

なるべく落ち着きつつそのドアを観察する。

そこで気がついた 左上の所にあるそれ

大きくはない長方形の板みたいなもの。

それに何か書いてある。

これは・・・何を意味するんだ？

ただ表札に「柳井」と書いてあるだけなのだが
もちろんそんなもの読めない彼は
その「柳井」の文字に見入ってた。

文字なのだろうか。絵なのだろうか。

レヤンナジグはその事で頭がいっぱいになっていた。

3 (後書き)

内容うんぬんよりも名前を考えるのが苦手です。自分で付けといて覚えられません。横文字ネーム苦手なんですよ。

内容はゆっくりすぎですがじわじわ進みたい。進めばいいなあと思つてます。

次くらいにそろそろリックセイテンの住民(の誰か)とヒロインを対面させたいです。

リビングに戻ると千尋はおもむろにタバコをくわえた。

手に嫌な汗をかいている。

…いや、手だけじゃない全身にその汗を感じる。

カチっカチとライターに火をつけようとするがなかなかつかない。

この汗のせいだろうか…

チャイルドロックでやたら着火しにくくなったライターのせいだろうか。

ああっもういらつく!!!

少しでも落ち着こうとタバコを吸いにきたのに・

ライターまで思うようになりゃしない。

マッチだな。マッチ。

リビングに置いてある籐でできたダークブラウンの引きだし

そこに細かい物をなんでも突っ込む千尋は

引きだしからスナックの名前が書いてあるマッチを取り出した

力の入れ過ぎでマッチを数本無駄にはしたが

やっとタバコに火を着けることができた。

ふんっふんっふんっふんっふんっふんっふんっふんっ

愛用しているタールの低くないメンソールのたばこを
思いっきり肺に吸い込み 吐き出す。

体に悪いしお金はかかるし 部屋はヤニで茶色くなるし 人には嫌
がられるし

まったくろくなものではない。百害あって一利なし とは良く言っ
たもんだと思う。

しかし、悲しいかな…わかっていても辞められないのが喫煙者…

千尋は煙を吐き出しながら 窓の外を何気なく眺めた。

…あれ？違和感を感じない。

玄関を開けたときは多大なる違和感を感じた（当たり前だ）のに
窓の向こうはいつもと同じ景色。

9階のこの部屋からの景色は気に入ってる。

天気の良い日は富士山が見え 寝室の窓からは小さいが都庁と東京
タワーが見える。

夜景も朝焼けもキレイで 季節になればとある花火大会なども見え
た。

うん。窓の外はいつもと一緒と思いながら窓を開けベランダに出る。

あ…ダメ… また違和感…

風が・・・ない・・・だと？

普段から突風とまではいれないが 風のない時などなかった。
匂いも外の匂いを感じられない 感じられるのは温かい日差しだけ
午前中に干した洗濯物も風になびいている様子はなかった。

マンション脇の道路では普通に車が流れているし人も動いてる。
信号だつて普通のタイミングで変わる
空を見れば 雲も流れていくし 鳥も飛んでるのがわかる。

普通の ごく普通の日常がそこにある。

なのに・・・なんでだ・・・

自分だけそこから隔離されたような感覚。
ベランダがビニールハウスにでもされたような・・・
日差しだけ感じて 他のことは感じるできない。
風も匂いもなければ・・・音すら聞こえなかった・・・

無音、気がついた時はそれが恐くなった。

普段の生活ではTVをつけない時の方が多いし
音のない空間は嫌いではない。

でも・・・人の生活音 車の音 風の音 すべてがまったく聞こえない
本当の無音。

さっきの嫌な汗がまた吹きあげてきた気がし
両腕を自分で抱え 自分で自分を抱きしめる。

なんか・・すごく怖い。

なにかが起こってる気がする。

なに・・なんなの!?

TV・・そうだ TV着けよう。

無音とか気にならなくなる。

誰かの笑い声でもニュースを伝える声でも作られた音でかまわない

急い電源を入れたTVには「受信できません」の文字が浮かぶだけ
だった。

呆然としたその瞬間

「ドスンッ」と大きな音が玄関の方から聞こえ

千尋は 心臓が止まるんじゃないか?と思うほど驚いた。

玄関にゆっくり歩み寄る。

この外では何か良くないことが起きている・・と

なんの能力も持たない頭ですら危険を察して警告してくる。

でも・・・行かなくちゃ・・・

逝きたくはないけど 行かなくちゃ・・・

息を殺し そおおおおっと玄関のドアスコープを覗いた。

目があった

文字どおりである。

目があったのである。

誰かがこちらを覗いていた。

千尋は またもや心臓が止まるほど驚いた。(本日2度目)

ひっ と驚き後ずさった。

痛い！！！心臓がこれでもかっけてくらい痛い！！

びっくりした・・・なんてもんじゃない。

声を出さずに我慢したのは褒めてもらいたい。

つつか・・・驚きすぎて声も出なかったつと云った方が正しいが。

驚きすぎて 死ぬかと思ったよ・・・

これはやばい。絶対やばい。何がやばいって、
全てがやばい。これ以上にないくらいやばいって・・・。

あーあ っもう 思考回路がうまく動かない。

ドアスコップ覗いて 人の目があった・・・とか
都会で聞くある意味現代版怪談話のひとつじゃないか。

怖いものなんていっぱいあるけど
生身の人間が一番恐いって・・・

∴ ストーカー？

いや まで もうすぐ産まれて29年になったりするが
そんな被害あったこともなければ 他人の視線なんて感じながら生
きたこともない。

え・・・じゃあ 泥棒？

土曜の昼間に大胆に玄関から入る泥棒・・・？

あんな大きい音出すだろうか・・・？

つうか、その前に玄関先が広間になってたあれはなんだ・・・？

そして・・・人の目・・・バイオレットの瞳だった。

見たことのない色をしていた。カラコンにしても趣味が悪い（余計なお世話）

何にも考えず宅急便のお兄さんにハンコを押してた時間が懐かしい。
まだ30分くらいしかたつてないけど マジで懐かしい。
戻れるなら戻りたい！！ってーの。

いや マジで・・・。

第五研究広間のレヤンナジグはまだ悩んでいた。

左上の木の板のことはもういい（早い）

いくら見てもなにを意味してるのか答えが出なかったのだ。

次に視点が移ったのが ドアの取っ手部分

見たことのない形式ではあるが特別に変わったことはなさそうに思う。

怪しさ満点だが・思うしかなかったのだ。

手にとって見ようとしたのだが 触れることが出来なかった。

取っ手の部分に触ろうとして、数回手が空を切ったので簡単に諦めた。

(表札も同じように触ることができなかった)

ちよつと・・屈辱だ・・なんて思ったのは内緒

しかし少しイラついたので

簡単な攻撃魔法陣を書き ドアに向かって発動してみる。

ドアに向けたその魔法

なぜだか急に方向を変えたように見えドアの脇に当たり
広間の壁に少しだけ焦げ跡を作った。

解せぬ。

なぜだ!!!!!!!!!!!!

私の魔法陣は完璧だったはずだ!!!!

なぜ的を外した・・・？

納得いかない。

あんなにはつきり見えてるのに幻術かなにか？

それであれば取っ手に触れないのもわかる。

しかしそんな術の気配はないのだ・・・

レヤンナジグは眉間に皺を寄せドアにもう1度近付く

ドアの中心より少し上の部分に丸い…ぽっち？

なんだこれは…

たかだかドアを1つ見つけただけなのに

なぜこうもわからないことばかりなのだ。

そしてその丸いぽっちらしきものを好奇心で覗いた。

真っ暗で何も見えなかった。

…もういい。

なんだか色々ムカついてきた。

あの馬鹿6人に昨日何をしたのか聞けばいい。
動けない・・とか魔力の枯渇とか
そんなのどうでもいい。

今の私の疑問からは 彼らの体調などどうなるうとかまわらない。

いや・・第4王子ならどうしたっていいだろう。

他の5人は 一応客人だから 手出しはやめておこう。

レヤンナジグは眉間の皺を深くしながら
キシリハウアの部屋に向かった。

5 (後書き)

レヤンナジグは生真面目ですが短気です。

6 (前書き)

やっと未知との遭遇

人間パニックになったら何をするかわからない。

携帯を開きミクシ○でつぶやくか・ツイッ○でつぶやくか…
ヤ○ー知恵袋で相談するか…
千尋は真剣に考えてた。

「玄関先が広間になってました。ドアスコープを覗いたら紫の目がありました。」

「どうしたらいいでしょうか？」

「どうもこうもない。」

「貴女はイカレテます。病院をお勧めします」

そんな答えがきて終わる。

だがそれをするとはかなわない。

携帯を開いたら 圏外 になっていたのだ。

家の中ではトイレ以外3本バリバリたっていたのに…

本当に…この家に何が起きているのだろうか。

いつも暮らしている部屋なのに

私と部屋以外…何かがおかしい。おかしすぎる。

ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああ

もおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
わけわかんない!!

女は度胸!!!!!!!!!!なるようになる!!!!!!

千尋の頭は完全にキャパシティーオーバーになっていた。

なにかが急にふっきた。メーターいっぱいふりきってしまった。

まるで深夜にちよっとお酒を飲んで

余計なゲームをネット通販でノリでうっかり買ってしまっようなデ
ンション

朝起きて後悔するあれと一緒にである。

彼女はこの後の行動をやっぱり後日後悔したりしなかったりする。

もう一度玄関にゆっくり近づき 音を立てないようにドアスコープ
を覗く。

良かった・・・ 目はない。

ふうと深呼吸して ゆっくり外を眺める。

やっぱりダークブラウンを基調とした広間

右奥に大きな窓があり、左壁の方には本棚

あまり良くは見えないが なんとなくそれは認識できた。

人・・・の気配は・・・なさそう？

あのバイオレットの瞳は・・・なんだったんだろうか。

もう 立ち去ってくれた？

さっきの大きい音が気になる。

玄関を破壊されてでもしたら怖い・・・

ちょっと外を確認したいな...

ちょっと、ほんの少しだけ...

千尋は ドアチェーンを付けたまま ゆっくりそおーっと玄関を開いた。

「ガシッ」「ガンッ」 2つの音と共に

ドアの中心あたりに手が掛けられ 下の方は黒いブーツみたいなもの

今まで拒否してきた思考。

まさか…トリップ？

いあいあいあ。勘弁してよ

無理だ そんな設定 無茶ぶりもいいとこだ。

うん。違う。トリップなんかじゃない！！！！！！

そんなわけあるわけないじゃんw

ちよつと顔が整いすぎてて ナルシスト入ってる人のコスプレだっ
てw

きつとそう！そうに違いない！！ そうじゃなきゃ困る！

正直、無理な設定ではあると思うが そう思わずにいられない

だがしかし 千尋は気付いてしまった。

ドアを押さえている手

細く長く白く綺麗なその指は 6本あった。

見なきゃよかった……そんなところ……

6 (後書き)

ダラダラして進まない。ごめんなさい。

・・・見間違い。キノセイ。作画崩壊。

さて どれだ？

見間違いが一番妥当よね。私 あわててるし 今正常じゃないし・・・

指が6本とか・・・見間違いだ。

あれだ・・・指に見せかけたナニカだよ。きつと。
ナニカはまったくわからないけど・・・

一瞬ひるんでしまったのは仕方ないはず

その瞬間を相手は見逃さずに

内側のドアノブを握っている私の手を隙間か捕えた。

「聞きたい事があるんだけど、ちょっといいかな？」

え・・・なにこれキャッチ？セールス？

「家は結構です。間に合ってます！！ じゃ・・・」
って
ドアをもう1度閉めようとしたけど 手は銀髪に捕えられたままで
なすすべがない。

「君……この世界の人間ではないよね？」

開いた口が塞がらない ってことういうことだろうか。
何言いだしちやってんのこの人……

へーそうなんだ。と頷くか

ああ、やっぱりね。と納得するか

んなわけあるか！ってキレるか

ハイハイ と適当に流すか

……で？っていう……みたいな。

私からの言葉を待っているのだろうか。

キレイなブル0グレーの瞳はこちらを離さない。

こんなイケメンに手を捕えられ 瞳を逸らさないと見つめられるな
んて……

ダメだ。

萌えない。

ちよつと頑張つて現実逃避してみようと思ったけど
いかんせんこの状況は頂けない。
手も腫も 即効離してほしい。
無理だ。色々ついていけない。

この世界の人間ではない ってなんだ。
どの世界のお話ですか・・・？
元々突っ込み體質ってほどじゃないのに
さすがに突っ込まずにはいられない。

「君は・・・誰だい？なぜここに居る？ このドアは君の部屋のも
のかい？このチェーンはなに？」

矢継ぎ早の質問に

「なぜここに居る？・・・のかなんて・・・こつちが聞きたいくらい
よ！！！」

貴方は誰？この広間はなんなの？どうなってるのよこれ・・・」

質問に質問で返すのは あまりよろしくはないだろうが
私だって 彼の言う「ここ」っていつのがどこの事なのか。
彼は何者なのか。聞きたいことは沢山ある ぜひお答え願いたい。

彼ならこの状況を説明できるのか？
今 何が起きているのか？

「・・・ ちょっと落ち着いて話したいんだけど このチェーン
を外してもらえないかな？」

「出来るだけ穏便でわかりやすく簡潔に、
なおかつ（私の心に）優しく納得のいく話ならしたいです。それ
意外は嫌です」

「（我儘だな・・・） 女性には優しくするよう心がけているぞ。悪
いようにはしないから・・・」

どっかのナンパ師のような安いセリフであるが
千尋はそれに頷き チェーンを外し ドアを大きく開く

玄関先でご対面

イケメン様ご降臨である。

隙間から見えていたのよりも・・・はるかにイケメンである。

銀色の髪を後ろでひとつに束ね　ブルーグレーの瞳　口もとの黒子
肌は白く　背も高い　やや細身の印象は受けるものの
なんて言うか・・・色っぽい。

元から勝負なんて挑んでいないけど・・・

なんて　どうか・・・負けた。

完敗だ。完敗

あんなフェロモンでねえよ。

むしろ出せてる人間を見たことがないよ。

それに対して

ロンT　パーカー　デニム　ラフ度100%

すっぴん度　80%

まったく持って　並んで良いレベルの話じゃないww

Lvマックスの勇者に挑んだ町人Dくらいの域

つつかただのモブ。

千尋はまたドアを閉めなくなった。

8 (前書き)

呪い

とある国の話をしよう。どこにでもある話さ

もう300年前になるのかなあ。まあ だいたい2〜300年前の話だと思う。

その国の気候は穏やかで 海と山、森もあり自然に囲まれた裕福な国だった。

国の北側に白く大きな森があつてね そこにその国のお姫様が迷い込んだ時があつたんだ

当時そのお姫様は少し遠い戦国の王から側室に……っていう打診があり

それに嫌がった姫は何も考えずに逃げようとしたんだろうね。

「白い森」そう呼ばれているけど 本当に白いわけじゃない。

森の奥深くに建っている白い塔 誰もそこまで辿りつけたことのない塔

もしかしたら誰かがたどり着いてるのかもしれないけど……

戻ってきた人間がいないんだ。確認しようがない。

白い塔を囲う森 で 白い森。

姫はそこを目指したのか ただやみくもに森を歩いたのか 誰かがそこへ導いたのか

どうにかその塔へ辿り着く。そこで1人の若い男と出会うんだ。

その若い男と姫は約束をする。

戦国の王を倒してくれたら姫はその男の妻になる・・・と。
もちろん姫はそんなことできやしないと思ってた。

若い男・・・若いだけで やぼったく薄汚い感じがする。

側室なんてプライドが許さないけど、この国は戦ではかなわないのはわかってる

何もせずにいられない。でも自分ではなににもできない。

誰かなんとかして欲しい。

その気持ちだけで 姫は若い男と交わした約束

姫を側室に娶りに来た戦王

それを一瞬で消した若い男

文字通りである 一瞬で消したのだ。

王も従者も護衛の騎士達も馬車も手土産に持参した宝石さえも・・・
それどころではない 戦国そのもの全て 消し去ったのだ。

戦王を倒して欲しいと願ったのは姫。

それを叶えたのは若い男。

妻に・・・と迎えに来た男を姫は激しく拒絶した。

彼の風貌がどうの・・・などという問題ではない。

何もかもを瞬時に消すような 「未知なる強すぎる力」 恐怖でしかない。

国王もそれを見ていた国民もそれを見ていた。

若い男に対する感情は「恐怖」でしかない

しかし約束を破ったら あの力が 今度はこちらに向かってくるかもしれない。

国王は姫を差し出す方向で話しを進めた。

そしてそれを嘆いた姫は 国王と若い男の前で 自害する。

若い男の周りに風が吹いた。

さつきまでやぼったく薄汚い風貌だった彼は見たことのない男に変わっていた。

黒い髪 赤い瞳 すらっとした身長にマントをはおり

うすら笑いで 短剣で胸を突き真つ赤に染まった姫を見下していた。

「ふうん。僕の元にくるのが そんなに嫌だったんだあ 自害するくらいなら・・・」

僕の手なんか煩わせないで 最初からそうしてればいいのになあ。女って勝手だねえ つまんないなあ。オモチャなくなっちゃったじゃない」

「き・・・きさま・・・何者だ・・・」

王様はもう動かない姫を抱き寄せながら 男と必死に対峙する。

「別に何もんだっていいでしょ。労働の報酬がなくなっちゃったから、ちよつと今ムカついてるんだよ ね。お前らなんかと話したくもない。黙っててよ」

男がそう言うと 王は口が聞けなくなる。

「あ、つまんないからさ 呪いかけていい？つつかかけるからw」
そう言って彼は消えた。

どんな呪いをかけるのか あるいはもうかけたのか・・・

王はそれを知るすべがなかった。

ただ・・・その呪いはゆっくり国を浸食していった。

この国は女性が少ない。

居ないわけではない「少ない」のだ。

女性は男児であるならば 何人でも産める。

女児の場合 母体か女児のどちらかしか残れないようになっていた。母体を助けると女児が・・・女児を助けると母体が・・・必ずどちらか片方しか生きていられないのだ。

この国の息子には母親がいるが 娘には母親は生存していないことになる。

女性が命を落とすのは なにも出産だけではない。

出産で 1＝1 になり死亡するなら人口的に数は減らないが

事故・怪我・病気 色々なことで亡くなる場合もある

1＝0 になってしまうと ゼロはゼロのまま 決して増えることはない。

自分の妻や娘を失いたくない貴族達は こぞって国を出て行った。他の国で出産すれば・・・と 結果やはりどちらかしか残れなかった。

じゃあ、男には呪いはないのか？と思えば

他国で結婚した男性の妻は やはり女児を残して死亡した。

そして その娘が大きくなり結婚して・・・同じ道をたどった。

初めは偶然かと思われたそれもちゃんと調べ研究してみると
4世代目まで 皆他国へ行ってもその呪いは消えることはなかった。
反対に他国からこの国へ嫁いだ場合もわかりやすすぎるほど呪い
は有効で
じわじわと・・・この国を侵していく

呪いを嫌い他国へ移住する事は少なくない。
むしろ仕方ないとさえいえる。

女性もこの300年でだいぶ減った

妙齢の男子達は嫁を探し この国から出て行くのも多い。

ただし・・・居なくなつたぶん・・・老人は増えた。

海と山 自然の恩恵に恵まれ 気候の穏やかなこの国を
老後に・・・と 子育ても終わり孫も生まれ
呪いなぞどこ吹く風の 悠々自適な老人達が
やたらこの国へ移住してくるのである。

この国へ一歩足を踏み入れたら その呪いは即有効で
誰もこの国へ来ようと思わない
他国からくるのは 厄介者か変わり者の2托。
老後なら住みやすいいかもしれないけれど
それまではこの国に関わるのは止めといたほうがいい。

この大陸の者なら 誰もが知ってるお話ぞ。

呪われた国 リッカセイテン

・・・なんでこんなことになっているのでしょうかね。

銀髪のイケメン様が
リビングのソファアールに座ってコーヒーと睨み合っているらしいです。

いあ この状況になるまでに 結構すったもんだありましたよ？

なんでも玄関から外に出るな！！とかなんとかおっしやいましてね
じゃあ、不本意だけど家に・・・ってあがってもらおうとしたんです。

人の家の玄関を見たイケメン様は「狭い」だのなんだも文句をたれ
やがったり

土足で上がりこもったのを必死で止めたり

勝手に色んなドアを開けようとしているのをどうにかやめさせたり
物珍しそうに何でも手にとってみようとするのをなだめたり

・・・なかなか面倒臭いイケメン様でございます。

どうにかこうにかソファアールに座りましたよ。

頑張った自分に拍手を送りたいくらいですよ？

マジで大変だった・・・

とりあえず飲み物でも・・・とキッチンに立つたけど
何を出していいのか 一瞬考え込みましたよ。

だってイケメン様ってばなんだか色気とともに高貴なオーラを漂わ
せてきやがりましてね。

「高貴」とかそんなもん関わった事なかったですし
異世界とか言ってやがりますから・・・何が普通の飲み物なのかわか
りかねるし

銀髪6本指のイケメン様が何を好まれるのか？なんて知ったこつち
やないですし

結局自分の飲みたいものを出してみました。

まあ・・・よくよく考えたら コーヒーとか見たことない人種からし
たら

ちよつとハードル高かったかなあ。

ミルクとお砂糖入れてお好みでどうぞwなんて出したって
コーヒーの元の味を知らないと好みの味とか作れないよね。

イケメン様はブラックのコーヒーを試しに一口飲んだ後・・・
コーヒーを睨んでおりますのよ。苦かったのかな？おほほほほ。

えっ 私が悪いの？

だって飲みたかったんだもん。

今日は喫茶店でコーヒー飲む予定だったし・・・

・・・麦茶あたりの方が ハードル低かったかなあ？

「本当に・・・君は・・・異世界の人間なんだな」

「えっ 異世界とか・・・本気なんだ・・・。」

「ああ、僕の世界では・・・こんな奇妙な飲み物はないし、部屋がこんなに狭いこともないし、

部屋が珍妙な物で溢れかえってることもないし 女性が君みたいな格好をしていることもない」

「・・・ちよつと馬鹿にしています?」

「いや。そう聞こえたのなら謝るよ。でも僕らの世界からしたら事実さ」

(全然謝ってないし・・・)

「私の世界じゃこんなの普通ですよ?そりゃあ・・・ちよつと人様の家より物で溢れかえってるのは

認めますけど・・・ごくごく普通の生活基準です」

「ふむ。こつちの世界じゃコレが当たり前なんだろうね。よくわからない物に囲まれ・・・

魔術の効かないこの空間が・・・普通なんだね。」

「よくわからない物・・・とか・・・私にとっては生活必需品ですよ?・・・つてか 魔術つてなんですか!??」

「君の世界では魔法は存在しないのかい?」

「しないですよ。当たり前じゃないですか・・・」

「当たり前前ねえ・・・僕らの世界じゃ普通に存在するよ?現に僕はここで魔術を使おうとしてみたんだ。

・・・不発に終わったけどね」

「なに勝手に恐い事してやがるんですか!!!!!!」

「いや、害はないやつだよ？僕そんなに魔術得意じゃないし ちょつと試した・・・ってやつさ」

「・・・試しもなにも止めてください。部屋が爆破とか本気で困りますから!!」

「そういえば自己紹介がまだだったね。僕は

リッカセイテン国の外交補佐官ニマウハサリ・シュナイザー
—
応第3王子 よろしくね」

!!!!!!!!!!!!!!

王子ときたよwww王子とかきやがりましたよwww
つつかりッカセイテンって どこぞそれ・・・

「今更な気もしないでもないけど・・・柳井千尋です。日本って国に暮らしています。」

今もそのつもりです!!」

「や・・・な・・・い？でいいのかな？それとも ち・・・ひろ?」

「や ない お願いします」

「了解。僕はニサリでいいよ。」

「いえ・・・お断りします」

「えwなんで!？」

「第3王子とやらなんですよ?そんな人 気易く呼べませんよ。」

「いや ここではそんな肩書関係ないだろ?ニサリでお願いするよ。敬語もなしね。」

それとも・・・僕が「お願い」してるのに聞けない・・・とでも?」

あ、なんか一瞬ブラックが見えた・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・はい。ニサリ これでもいい?」

「よくできたね。じゃあ ちょっと君を何故 ドアから出させなかつたのか

そこから説明しようか」

「あ、うん。お願い」

そしてニサリはゆっくりとリックカセイテンの呪いについて語り始めた。

一歩でも足を踏み入れたら・・・その呪いは有効だと聞かされた。

私は・・・どうなんだろう？

玄関の向こうはリツカセイテンだと言う。

でも窓の外の景色は日本だ

じゃあ・・・この家は？

日本にあるの？リツカセイテンとやらにあるの？

その呪いとやらに・・・私もかかってしまったの？

その不安が顔に出ていたのだろうか

ニサリはうつすら笑いを浮かべて

「子供産んでみればわかるんじゃない？」などのたまわった。

「・・・・・・・・・・なにその意味のわからない検証方法。

女兒産んで死んだら 呪いにかかってました

生きてたらかかってませんでしたって・・・

検証時間長すぎるわ！！ つうか誰の子孕めっていうのよ・・・」

「そんなの俺の子でいいじゃん？女兒産まれたら引き取って王女にするよ？」

リツカセイテンで女性は貴重だしね。」

「なんで命を賭けた呪い検証にニサリの子供産まなきゃいけないのよ……」

「だって女兒が産まれればリツカセイテンにはありがたいし君が死ねば この面白そうな部屋も僕のものになるだろう？」

一石二鳥じゃないw w」

笑顔でニサリはそう言うと二人掛けのソファで私を押し倒してきた。

をいをいをい 本気か……おまえ……

ちよ まじむり

まじで無理だからああああああああああああああああああああ……
あ……！

私の叫び声は外に出ることはなかった。

ニサリに唇を奪われていたから……

いくらなんでもその展開はないと思った(泣)

9 (後書き)

ニマウハサリの考え方は極端です。

私の10連休初日はろくでもない事のオンパレード

あれか？地味な負け犬女は連休なんか取らずに

ずっと仕事でもしてろ！！っていう誰かの呪いですか？嫌がらせですか？

そーですか。呪いですか。。。。

リツカセイテンの呪いなんか知ったこっちゃないよ。

私自信、今、この状況が・・・呪われてるとしか思えないって！！！！

頭を片手で固定しつつ体重をこちらにかけ人の唇をむさぼってるニサリ

銀髪がさらりと落ちてきて顔をくすぐる。

酸素を求め 手から抜け出そうとしてもすぐに追いかけて唇をはずしてはくれない…………。

初めは抵抗しようとしたけど

力技では やはり男性にかなわない。

まあ・ニサリの場合 力技+早技でした

あいてる両手で押してみたけど びくともしませんでしたよ。線が細そうに見えてもさすが男ってやつですね。

だからって別にあきらめちゃいけませんよ？

まあ、唇の方は諦めました。

イケメンとのキスくらい別に思い出の一つに数えてやりますよ。

そんなこともあったわねえ　　ってくらい過去の事として忘れてあげます。

だけど・・・貞操は守りぬいてやります!!!

いくらイケメンとはいえ　こんな簡単に会って1時間とかで体を許すわけないじゃん!!!!!!

唇は・・・許しちゃってるけど・・・

こいつの子供とか・・・絶対に産まねえ

後でニサリには　ブラックコーヒー　一気飲みの刑ですよ。

慣れないカフェインで　夜とか眠れなくなればいいんだ!!!!!!

宙をさまよっている右手は　コーヒーの置かれてるテーブルまでぎりぎり届く

テーブルのはじっこには　いつも並べて置いてあるリモコン　そう。リモコン。

さっきTVは受信しなかったけども　電源は入った。

レコーダーのリモコンを探り寄せる。

んーなんのDVDがセットしてあったかなあ。

なんだっただけ・・・

あーわかんない・・・

ちよつと・・・

気持ちいい・・・

なんて思っちゃいけない！

ニサリのキスは濃厚なものに変わっていて 人の口内を勝手に犯してるけど

そんなの答えてやる義務なんてない 絶対その舌に答えてなんてやらない

そう思っただけ

久々のキスは・・・どこか気持ち良くなって・・・思考を持って行かれそうになる。

ニサリの左手が おかしな動きに変わった。
人の体をまさぐり始める。

思考を持っていかれてる場合じゃない!!!

ちよー危険 めっちゃ危険

ヤバイヤバイヤバイ

DVDは何がセットされてるか思い出せないけど
この際仕方ない。

私はポリリウムを最大限に大きくしてから
レコーダーの再生ボタンを押した。

「げ〜こお〜くう〜じょ〜だぜえ〜 つ〜ぶう〜せえ〜」

そんな歌が爆音で流れる。

某テニス漫画原作のミュージカルだった。しかも途中から……

「のお〜しあがるぜえ〜」

きゃーひ〇し〜vvvv

なんて言ってる場合じゃない。

大音量すぎて何を言ってるかなんてわからないほど音割れしてるけど私には全部わかる。これが愛か・・・？（）（）

ニサリの手は止まってた。

もちろん唇も離れてる。

表情的には「ぼつかぁーん」の域だ。

その間に私はソファーから抜け出し キッチンに口をゆすぎに向かった。

ニサリは耳を押さえながら

「おいー！」

「おおいー！……！ 騒がしい！……！ これはなんだ！……！」

と叫んでた。

私にとつちやニサリの方がやかましいっての……。

次のもしもの事を考え キッチンでさりげなく包丁を探す。

この家で武器になるものなんてない。

包丁しか思い浮かばなかったのだ……

刺したことも刺されたこともないけど

もう絶対押し倒されたくなんかない。

レコーダーの音量を少しさげ (消さないわよ？見てたいもん)

包丁を握りしめた時

玄関が開いた気がした。

10 (後書き)

テ〇ミュは作者の趣味の1つです)どーでもいい情報)

11 (前書き)

お気に入り登録ありがとうございます。めちゃくちゃ嬉しいです。

ワイワイ ガヤガヤ ドタバタ

・・・・・・・・・・・・・・・・何事デス力？

今日はもう何があってもいい加減驚かない！！くらいの気持ちはあった。

玄関先は知らない場所で ドアを開けたらイケメン様で
異世界だとか言われ 呪いを聞かされ

その上襲われかけた。

もう充分でしょ？

女は度胸！なんて言い聞かせたけどね…

開き直るのも限度つてもんがあると思うの。

……飲んじゃおっかな？

私がキッチンで包丁を握った時
玄関の方で音がした 気がした。
DVDの音が大きくって 良く聞こえなかったけどね。

?となつた時には

ワイワイガヤガヤドタバタ・・・と 人が入ってくる気配
複数かよっ！！！！

ハサリ1人でも勝てるかどうかかわからない状況なのに
これ以上増えますか・・・
勝手に入ってきやがりますか・・・

もう・・・マジで 飲んじゃおっかな。

自宅なのに 大好きな自室なのに・・・
こんなに家に居たくないって思うことがなかったくらい

今 ここに居たくない！

肉体的に無理なら精神的にだけでも

酔っ払って意識飛ばしちゃダメですかね？

その間にハサリに襲われかねない危険性はあるからそんなことできないけどさあ

襲われないで済むのなら この場でキッチンドランカーになってやるのに！！！！

意識飛ばす事ができるなら、料理酒だつて飲んでやります。

そうちょっと人がやさぐれ始めた時 ハサリが玄関へ向かっていた。

DVDの音量をかなり小さくおとす。

でもまだやっぱり消さない。

あまりに非日常的なことがわんさか襲ってくる中で

画面の中の（一方的に）見慣れてる彼ら達だけが心の寄り所みたいな状況になつてる。

彼らの前で襲われたり 誰かを刺したり誰かに刺されたりなどとするもんか。

キッチンドランカーになったりもできない。そんな姿見せられない

！（見えないけど・・・

（一方的な）想いだけど・・・好きつてすごいな・・・

「萌え」つて 偉大！！！！

心の中でそう唱えながらガッツポーズを決めつつ

二サリを後を追うように玄関へ出向いく。

そんなに広い家じゃないから・・・別に外向かなくっても
会話聞こえてくるけどね・・・。

家上がりこむ前に 玄関先でその騒動を留めたい・・・と心底願った。

「だぁーかぁーらぁー 靴は脱ぎなつて!」

「ぬ。なぜここでは魔術が発動しない?」

「ねーこれなにー?」

「狭すぎる場所だな・・・ 剣を抜かせにくくする為か!」

「靴脱がないと 怒られるよ?」

「ふぬ・・・魔術の効かぬ空間か・・・興味深い」

「うわっ なにこの部屋 箱がいっぱい。倉庫?」

「貴様ら!油断するなよ・・・魔術も効かず剣も抜きにくい場所だ・・・
戦い難いからな」

「ちよ、狭いんだから順番で靴脱ぎなよ。」

「ねーねーこれ開けてみてもいいのかなぁー?」

「脱いだ靴は、持ち歩くのか?」

「そこ置いといていいみたいだよ」

「置き場所などないではないか」

「ケイトの靴だけでいっぱいになるね。」

「足が大きすぎるからな」

「騎士の靴つて無駄にごつついすぎるんだよ」

「ふっ なんとかの大足つていうくらいだからな」

「ほう。ジীগそれは俺様に喧嘩を売つてるといつことでもいいんだ

な？」

「喧嘩なんて利にならないもの売りはしない。事実を言ったまでだ」

「ジークー！きさまああああ 表へ出る！！！！」

「ケイトだけ出ればいい。無駄に力は使う気ない」

これ・・・日本じゃなくって良かったなあ・・・

絶対苦情きてるよね。隣近所に菓子折り持って平謝りしなきゃいけないとこだったな。

そのまま外に出て戻ってこなきゃいいのにな。

・・・なんでカギを閉め忘れちゃったんだろう。

面倒臭そうないケメン×4と対峙しなきゃダメなのかな・・・。

あいつら皆爆破しないかな。

などと意識がちょっと飛びかけた時

「で、ヤナイ 靴はここでいいのかい？」

とニサリがわざとらしく声を掛けてくる

その言葉に反応して残りの面倒臭そうないケメン×3が一斉にこっちを見てきた。

「コッチミンナ」

と本気で思ったのは仕方のない事だと思つ。

11 (後書き)

王子4人衆は協調性皆無です。

た目？

そうですか。イケメンでも覗き魔ですか。

私は居場所がないのでキッチンに移動してお茶の用意をする。

ここはまた・・・コーヒー？

でもさつきニサリがなんとも言えない顔したしなあ・・・

普通に麦茶？日本茶？個人的にはほうじ茶が好きだけど、

あれ飲むと和菓子食べたくなるのよね。

お茶受け・・・。なにがいいんだろ・・・。

まあ、自分から呼んだ客でもないから、飲み物だけでよね

面倒臭いし・・・お菓子なんて

得意のネット通販で頼んだご当地ポテトチップス（名古屋手羽先味は意外に好き）と

「まずい」で話題になってたご当地ドロップしかない。

しかも納豆ドロップとかつぶしドロップとんこつラーメンドロップ、

どれも不味くってお土産に渡したのに相手から「いらない!!」と

返却された逸材

・・・ドロップ舐めさせて見たいな。

でも一応、一応ではあるけどニサリ自称王子だし・・・

この4人のやり取り見てると 皆同等の権力ありそうよね？

余計な事して怒らせるのも まずい気がするし

普通のお茶だけで・・・我慢しよう。

淹れるの簡単だし紅茶で決定。Tパックで十分でしょ。

蒸らすとかしない お湯に何回かちよいちよいつてやって色さえ変われればいい。

全部で5個か・・・さすがに1個のTパックじゃきついな？

てか、忘れてたけど、すごい空腹なんだけど一人でカップ麺すすっちゃダメ？

紅茶の用意をしながらリビングに居座る4人を眺めた。

4人が4人ともイケメンすぎる。

この国の基本ってどんななんだよ!!!

あれか！普通の顔は死刑か！

平凡は悪ですか！コノヤロー!!!!!!

つと声を大にして言いたい気分になる

ニサリは好奇心でうずうずしているっばいはちみつ色の少年を座らせとくの到手間取っているみたい。

態度の大きいイケメン様も部屋の中に興味はある見たいけど今の興味は・・・TV画面の中の映像みたいです。

テニ〇ユ見てるよwww 釘付けだよwww

えっと誰が気に入りましたか？

私の推しはひよ〇です。渡しませんよ？()

そんな中 紫瞳の覗き魔さんが 席を立つ

窓を開けベランダに出て行く。

・・・タバコですか？部屋でもおkですよ？私も喫煙者だしなどと思いつながら淹れ終わった紅茶をテーブルに運ぶ。

テーブルに紅茶をセットしていると

「ちよつといいですか？」 ベランダの方から声が掛かる。

「はぁ・・・」

「なんででしょうか？」

「そんなにかまえないで下さい。ちよつと聞きたい事があるだけですから」

「は・・・い」

「ここから見える外の景色が貴女の世界ですか？」

「ええ・・・私の世界です」

「私達の世界とはずいぶん違うんだな・・・こんな高い所に人が住むなんてありえない、建物が密集しすぎてるし、あの下でちよこまか走ってる物体はなんだい？空を飛ぶあの奇妙なものの動力は？」

「あそこで3つの色が順番に光るのはなんの為？それから・・・」

「ちよ・・・ちよつとストップ。待って下さい。そんな一気に聞かれ たって答えられないです」

「ああ・・・すまない。少し興奮してしまったようだ。私としたことが恥ずかしい」

「いえ、少し驚きましたけど・・・私の国は人口密度が高いです。

こういう風に土地を活用しないとい けないくらいです。まあ・・・地方行けばいくらでも土地は余ってるかもしれないですが

この辺りではこんなもんですよ。走ってるのは車 人が乗って素早く移動する乗り物ですね。

空を飛んでるのは飛行機です。動力うんぬんは良く知りませんが 車と同じでエンジンつというも のを積み燃料を使って動いてるはずです。順番に光ってるのは・・・信号のことですか？

路を通るのもあれで順番に通ってるんですよ」

おおざっぱすぎる回答だとは思うけど・・・こんなもんでいいかな？

「ふぬ。魔術はない・・・と聞いたが 私達とは違う力を使ってるんだな。文明がここまで違うか。」

「私はまだそちらの国を見ていませんが・・・まったく違う文明なんでしょうね」

「ああ。まったく違う。あとあそこの建物の上に書いてある文字・・・と絵か。あれなんなの為だ？」

「ダツ〇引つ越しセンター・・・？」

「企業・・・会社の広告看板です。ああやって目立たせて人の目に着くようにしてあります」

「私がこの家に入る前に貴女の家ドアの横に長方形の板みたいなものに何か書いてあったが・・・」

「看板か？」

「いあいあいあいあ。それは表札と言って ここに誰誰が住んでます みたいな表示です」

「ではあれは・・・貴女の名前か？」

「はい。やない と言います」

「やないか。私はレヤンナジグと言う。よろしく頼む」

「はあ・・・よろしく・・・です」

「この家に入る前その表札に何が書いてあるかわからなかったよ。文字など読めなかった」

「そうなんですか？」

「だが今はその外の看板とやらも普通に読めるんだ。不思議だよね」

「言語は・・・通じてますよね？一緒では・・・？」

「多分違うはず。ただこの家、空間では同じことを話してるように聞こえるだけじゃないかと思うんだ よね。」

「ここから外を眺めた時にね、見えないけど少し魔術の気配がしたんだよ」

「魔術・・・ですか？」

「ああ、貴女と、この部屋は私達の世界へ引つ張り込まれようとし

「しつとねし」

「貴女もすぐに呪われると思っよ。いや……もう既に呪われてい
るのかもね？」

呪い 呪われ 振り 振られ・・・って意味わからん。

自分の思考がちょっとおかしくなってる気がします。

「そうですかぁ・・・」

呪いとやらは恐いと思う。もし女兒を出産しても

この手に我が子を抱いてあげられない・・・とか わかっていても切ないだろうなあ。

ま、子供産んだことないんでわからないけどね。

今の問題は・・・家

引っ張り込まれてるって なんぞ!!!

「この場所は 多分君の世界ではもう認識されてないんじゃないかな?」

「・・・目の前に私の世界が見えてるのにですか?」

「うん。ここはもうリツカセイテンの一部になると思うよ」

「一部・・・って・・・でも、でも 私の世界の文明?電気とかガスとか水道とか使えましたけど」

「こっちの世界にそれらってありますか?」

「その電気やらなんやらの事はよくわかんないけどね。そのうちに使えなくなるんじゃない?」

えー 困る。

非常に困る。

それこそ生きていけない……。

呪いとかどうでもいいよ。知らないよ！

でも……電気は止めないで！

電気がないと……DVD見れないじゃん!!!!!!!!!!

夏ポーターでブルーレイの最新機種に乗り換えたばかりなのに!!!!!!
!!!!

「あとさ……貴女は気付いてないのかな？」

「え……何が？」

「貴女の思考……駄々漏れだよ。」

!?!?!?!?

「ひどいよね。人の国の呪いをどーでもいいとか？その電気とやら？がそんなに大事なんだね」

「え、あ、そういう・・・わけでは・・・」

「私達の国の住民はその呪いを背負って日々生きてるんだよ？赤子を抱けない母親の気持ち・・・」

「わかるかい？ 女兒達は産まれて即母親を失うわけだ・・・彼女達の愛情の飢えが君にわかるかい？」

「妻か娘かを選択しないといけない夫の気持ちかわかるのかい？子供か自分かを選択しなきゃならない」

「母親の気持ちを知っているのかい？残されて生きていかなきゃいけない人の気持ちを知ってるのかい？」

「？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・わかるわけない。」

「だって 今さっき聞かされただけの呪いだもの。」

「私には関係ない！！って心のどこかで思ってるもの。」

「自分には関係ない。興味ない。って顔してるよ？」

「はぁ・・・だってよくわかんないし・・・」

「そつだよ。急な展開だったもんね？」

「話についていけないですよ・・・」

「当事者になればわかるかな？」

「当事者……」

「うんうん」

「え、あつ それって……」嫌な予感しかしない。

「わかるかな？子供じゃなさそうだし……別にいいよね？」

「いあいあいあ。わかんないですって。きっと良くないです」

「大丈夫だよ。優しくするし……私、上手いしね？」

「なにが！！優しくとか……上手いとか……なんで！！」

ゆっくりバイオレットの瞳が近づいてくる。

いやいやいや

まてまてまてまてこの展開、

無茶ぶりもいいところだから！！！！

これは あれか！ニサリと同じ展開か！！？

ないわあ……それはないわあ。

部屋に戻ろう！

急いで体の向きを回転させ・・・ようとしたけど

え・・・目の前に壁?????

あっちゅー間に レヤンナジグに抱きしめられている状況・・・っ
ぽい？

マジですか・・・。

ここベランダです。

一応屋外ですし

部屋に人居ますし

人前でとか無理ですし

そもそも会って即とか無理ですし

つつかこの展開がもう無理ですし

顔をあげたらきつと迫りくるバイオレットの瞳
その展開は断固拒否したい！

下を向き、頭を相手の胸に押しつけ 両手を相手の体に押しつけ抜
け出そうと踏ん張る。

「無駄なのに・・・抗う姿 可愛いですね」

え・・・なにこの人・・・ドS？

「大丈夫ですよ。貴女を大切にしますよ。・・・死ぬまではね？」

死ぬ事前提で話進めんな！！！！こんちくしょー！！

ベランダでの攻防戦

それを止めたのは 「おい。終わったぞ！」
と言う無骨な声だった。

今回は唇、死守しましたよ！！！！

無骨な声に振りかえると 態度も体格もやたらとデカイ銀髪が立っていた。

え・・・この状況に突っ込みナシなの？

この国で女が襲われるのは・・・日常なのか？とんでもない国だな！おい！

「お前の国の少年達は・・・頑張ってるんだな。」

は？ え、なに？それ・・・テニミ〇見た感想？

ねえ、目元赤いけど・・・泣きました？

ねえ、泣きました？そのやたらとデカイ体格で感激とかしちやいましたか？

もう1度聞きます。

ねえ、泣きました？

ちよつとそこは突っ込んで聞いておきたい。
普通は触れてはいけないのかもしれないけど・・・

私は問いたい。

そのデカイ態度で泣いたんですか？と・・・

まあ、そんな勇気ないんですけどね。

「ふっ 相変わらずケイトは空気の読めない男だね。それじゃモテナイよ？」

「ジグ、貴様が何を考えてるかなんて知らねえが、そんな貧相な女に手を出すほど飢えてんのか？」

「いや、貧相とかこの際どうでもいいじゃない。女性がこの国に取り込まれるのは大歓迎ですよ」

「ま、俺様にはどーでもいいがな。出来るだけ可愛い姪を産ませてやれ」

「ああ、そつするよ。ケイトには抱かせないけどね」

え・・・なにこれ？馬鹿にされてんの？

子供産む事は決定なの？
つうか・・・貧相って・・・こいつら・・・

「おい。お前 次は動物ものがいい」

なんの要求？

あ、DVDデスカ・・・。

まだ人の家に居座って観る気ですか。

自己紹介すらまだなのに・・・

動物物とか・・・何観せればいいんだよ！！！！

アンパンオンとか見せてみたいなあ。

あれは・・・動物物とか言い難いけど・・・住民が動物だからいいんじゃない？

私の国のヒーローは自分の身を他人に食べさせて餡子をはみ出しながら戦うんだよ。

頭に変えがあるんだよ？なかなかグロいよね。

アンパ○マンやつつけるより ジャ○おじさん倒した方が勝ちじゃね？

ド○ンちゃんは可愛いと思うのよ。どうかな？

アンパン・・・わかるかなあ？

てか擬人化とかこの国では有効ですか？

まあ・・・DVDなんて持ってないんですけどね！うひゃひゃひ

やひゃ

「おい。早くしろ！ぐずぐずするな！」

・・・急かされました。

レヤンナジグの腕の中をすっくと抜け出せた事は感謝します。

だが・・・しかし・・・

その態度はどうよ？

声を掛ける一言目が 必ず「おい」「ですよ。

目頭ちよつと赤いくせに！このやろつ！

いつか 螢○墓とか見せてやる。

大泣きすればいい！

嗚咽しながら泣けばいい。・・・泣くのかなあ？普通は泣くと思っけど・・・

この国の常識はどうなんだろうね。

でもまあ、テニミ○で泣くくらいだ。

きつと「せつこ~~~~~」とか言いながら泣いてくれるに違いない。

その姿を動画に納めてみたいもんだ。

「イケメン騎士に螢○墓を見せてみた」とか言う題名で某動画サイトにアップしてやる。

泣く姿を全世界に向けて晒せばいい！！！！！！！！

ん〜 何見せようかなあ〜？

DVDの並んでいる棚を見渡し1本のDVDを手に取る。

「となりのトトロ」

日本が誇るスタジオ〇ブリですよ。これならいいよね？

DVDをレコーダーにセットし再生ボタンを押す。

ところでね。

突っ込むのも面倒臭いから視界に入れないようにしてたけどさ・・・

どこから持ってきたのか知らないけど、手足はきちんと縛ってある。

そして鼻と口を手で押さえてるハサリ

そろそろ手を離してあげないと

少年死ぬよ？

切に願うよ。

人の部屋を殺人現場にはしないで欲しいな。

「ねえ、ヤナイ」

「・・・なんですか。ハサリ」

「なんで、僕に断わりもなしにジグに襲われてんのさ」

・・・

しらねえよっ！！！！　　って切れなかった自分を褒めたい。

何でハサリに断わってから襲われなきゃいけない？
てか、襲われたのは不可抗力だ！
むしろ見てたのなら何故助けない？

で・・・なんで私が責められる形になってんの？

すみません

突っ込みどころが多すぎて私には拾えません。

え、なに 私の立ち位置どこが正解なの？

「僕というものがありませんながら・・・もう違う男かい？異世界の女は軽いんだね」

「なにそれ・・・間違い探し？ あえて言うなら全て間違ってるよね。その言動」

「へえー 何がお気に召さなかった？」

「私は 貴方のものじゃないし貴方も私のものじゃない。違う男もなにも・・・さつきのは不可抗力。」

「ハサリとのだって不可抗力でしょ？望んじやいないわ。異世界の女が・・・軽いもなにも・・・
私はまだ誰にもなびいてなんかいないじゃない！」

「ヤナイは僕のものだよ？」

「はあ？そんなわけないでしょ！」

「そうだよ！ボクのもんだもん。」

「「はっ？」」

何故か・・・ハサリと私の声が重なった。

「おねーさんは ボクのだよw」

「ねーいい加減この紐解いてよぉー 手首痕ついちゃっうじゃん」

可愛い顔してサラツと爆弾発言してるような気がするはちみつ色の少年

「キリーは黙っとけ」

「えー充分大人しくしてたっしょw ボクもいい加減おねーさんと話したいしー」

ねーねー おねーさんwこれ解いてよ。解いてくれたらボクが皆からおねーさんを守るよ?」

ハサリ1人に手縄にされた身で何言ってるんだこの子……………。

おねーさん とか

守るよ とか

くりくりした目 とか

上目遣い とか

激しく萌えるじゃない!!!!!!!!!!!!!!

年下萌えなんです。

少年好きなんです。

可愛い子大好きなんです。

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

変なカミングアウトを聞かせて マジごめんなさい()()()

やだ。ちょっとキュンときちゃったじゃない。

この少年きつと女ったらしになるわよ？

・・・それとももう女ったらしなのかしら？

「し、仕方ないなあ〜 解いてあげるよ。」

べ、べつに守られたいとかじゃないんだからね？

痕がついたら可哀想だからよ？」

千尋は少年に近付き紐に手を掛けようとすがその手はハサリに止められる

「子供の出る幕なんかないだろ 僕ら相手に戦うのか？」

ハサリは何でもないように少年を嘲笑う。

「自分の食いぶちも稼げないようなお子様が 異世界の女性を所望するの？ やめといたほうがいい」
「と言い放ったのは、いつの間にかベランダから戻ってきて紅茶をすすっているジーク」

「まっくろくろすけでおいで〜」と小さな声で言ったのはデカイ態度の銀髪

「……お前は黙ってる。聞かなかったことにしてやるから黙ってる。」

「ハサリもジークも無駄だよ！ 諦めてよね！！ あとケイトは黙ってそれ見てて。」

可愛い顔してハッキリ言う子だ。

そして私の気持ちを代弁してくれてありがとう。

「だって、おねーさんと呼んだのはボクなんだから、ボクのも物でしょっ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3823x/>

ホワイトリール905

2011年10月21日02時58分発行